

Foreign Language Teachers' Beliefs and Practices Regarding Global Awareness: A Case Study of One Senior High School in Henan Province in China

グローバル意識に関する外国語教師の信条と実践

—— 中国河南省における高校の事例研究 ——

博士論文執筆者： 荆 紅 涛

中国における異文化間コミュニケーション能力の開発は、2001年の英語カリキュラムで提唱され、同時に、グローバル意識を育成する必要性が高校の英語教育において提唱された。しかしながら、グローバル意識がいかなるものかについては、教育実践のための詳しいガイドラインでは十分説明されておらず、現場の教師のグローバル意識を扱っている実証研究も少ない。グローバル意識に関する教師の信条を調査すれば、授業実践をよく理解することができるであろうと思われる。

本研究の目的は、質的ケーススタディ（qualitative case study）として、中国・河南省の高等学校における外国語教師を対象とし、グローバル意識に関する信条と実践を調査することであった。

協力者は21名の英語教師であった。データの収集方法は、詳細な聴き取り、フォーカスグループ・インタビュー、教室観察であった。データは、リサーチ・クエスチョンに従い、グラウンデッド・セオリー・アプローチによってコード化され、専門のソフトウェア NVivo8 を用いて、質的に分析された。

この分析を通して、グローバル意識の概念的枠組み、目的と重要性、言語学習とグローバル意識との関係、および教室での教授法について、本研究者は一定の結果を得た。

具体的には、普通科の英語授業では、中国人教師が語彙レッスン、文法レッスン、マルチメディア学習、英語授業研究会のようなさまざまな教育活動を通じてグローバル意識を育んでいることがわかった。本研究者は、知識、技能、態度を含むグローバル意識の枠組みを用いた中国人教師による授業実践を分析し、その枠組みと、授業で実際に言及されるグローバル意識の内容を比較した。国際科の英語授業では、3人のカナダ人英語教師による授業実践が、英語新聞、クリスマスの授業、演劇を通じてグローバルな諸問題について学ばせることにより、生徒のグローバル意

識を育成していることが分かった。

本論文は序論、先行文献、研究方法、結果、考察、結論から成る。第1章「序論」では、グローバル意識に関する教師の信条と実践を調査する本研究の背景が述べられる。まず、問題提起、研究目的と研究方法、理論の根拠と研究意義について論じている。さらに、用語の定義を行い、論文全体の構成も述べている。第2章「先行文献」では、グローバル意識と異文化間コミュニケーション能力の理論に関する教師の信条と授業実践が検討される。第一節は、グローバル意識の先行研究である。第二節では、外国語教師の認知と異文化間コミュニケーション能力を検討している。第三節では、グローバル・シチズンシップ教育と英語教育について述べている。第四節では、グローバル学習の理論と実践的な研究である。第五節では、教師の信条と実践の諸モデルを紹介している。第3章「研究方法」では、研究デザインと研究手順を紹介している。本章の構成は以下の分野の議論が含まれる。(a) 研究アプローチのための根拠、(b) サンプルとサイト、(c) 必要な情報、(d) 研究デザイン、(e) データ収集、(f) データ分析、(g) 倫理的配慮、(h) 信頼性の問題、(i) 研究の限界、および (j) 要約である。第4章「結果」では、インタビュー、グループインタビューや授業観察から得られた主要な結果を提示している。この章は主にインタビュー・データの分析結果と観察データの分析結果に分かれている。インタビュー・データの分析から、①グローバル意識に関する外国語教師の信条、②グローバル意識に関する外国語教師によって報告された実践、③教師の信条と実践に影響を与える要因が、そして、授業観察データからは、グローバル意識に関する教師の授業実践が明らかにされている。第5章「考察」では、第2章の先行研究と第4章で得られた結果を分析、解釈、総合し、これらの結果の意義や貢献を論じている。第6章「結論」では、これまでの内容の要約、本研究が示唆できること、本研究の限界、今後の課題について述べている。

論文に対する審査員の評価

英語教育に携わる教師の意識を調査する研究であることから、英文学コースの論文にふさわしいと考える。最先端の方法論であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた研究は中国の英語教育に関しては先例がないが、他の国々で実施された外国語教師意識調査の結果を裏づける結果を得ている。中国の英語教育に関する初めての質的調査でもあり、中国語で書かれた先行文献の英語による紹介も初めてである。

一見すると Finding #4 においてのみ報告されたカナダ・プログラムの授業観察データはあまり関係ないと思われるかもしれないが、本研究は中国の一高等学校全体のケーススタディなのであり、中国ではこのような特殊なプログラムの観察データが、その学校全体のグローバル意識を把握するにはきわめて重要である。本研究は、量的な大規模アンケート調査研究のように一般化できないが、質的事例研究として、量的研究ができない深い洞察を提供し、特定の状況につ

いての豊富なデータを提供している。そのアプローチには当然限界があるが、本研究者がそのことを十分認識していることは結論で示されている。

中国だけでなく、語学教育におけるグローバル意識一般の理解に大きく貢献するであろう論文であり、高く評価できる。博士号授与の条件を十分に満たしていると全員一致で判断した。

2013年4月17日

主任審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

Ph. D (テンプル大学ジャパン)

ユングハイム, ニコラス O.

審査委員 早稲田大学文学学術院 准教授

博士 (教育学) 国際基督教大学

ホサイン, タニア

審査委員 東北大学 准教授

Ph. D (ダーラム大学)

山田 悦子

La poésie comme pensée matérialiste de l'événement: Francis Ponge et Henri Michaux

『出来事の唯物論的思考としての詩作： フランシス・ポンジュとアンリ・ミショー』

博士論文執筆者：梶 田 裕

本博士学位請求論文は、文学は思考であるという命題を立て、「存在」と「出来事」をめぐる思考が、現代フランス哲学における中心的主題として浮上するのみならず、20世紀フランスを代表する二人の詩人、すなわちフランシス・ポンジュとアンリ・ミショーの詩作において決定的に重要な働きをもっている点を論証しようとするものである。ここで問題となる「出来事」とは、新しいものの出現を肯定する概念であるが、この主題を議論の中心に据えるための具体的手続きとして、本論文執筆者は、まずバディウ、デリダ、ドゥルーズなどの現代フランス哲学の代表的著作を丹念に参照しつつ、「存在」と「出来事」という二つの概念をめぐる複雑で難解な哲学的思考を整理し直す作業をおこなう。次に、これをポンジュおよびミショーという二人の詩人のテキスト分析をめぐる視点から再構成し、文学における思考の問題として「出来事」がどのように捉え直されるかという考察をおこなう。作品テキストの具体的な分析の面では、遊戯的な文字の配列および音の効果の問題など、時間経過的にして直線的な読解にとどまらず、範列的で垂直な読解が新たに微細なテキスト的連関を明らかにする可能性にも注意を向けつつ、綿密なテキスト読解を通じて、論者が「出来事の思考」と呼ぶテキスト生成のプロセスの解明をなしとげている。

本論文は、20世紀のフランスにおいてひとつの顕著な特徴としてあらわれる現象、すなわち哲学と詩が接近し交錯する地点および現象を研究対象として選ぶとともに、この対象への研究アプローチの方法論的側面においても、哲学研究と文学研究の総合を試みようとしており、とくにその点において、きわめて野心的で意欲的なものとなっているといえる。哲学研究としてみても、また文学研究としても独立して読むことができる独自の内容を備えており、ポンジュ論およびミショー論の部分が、概念的構図をテキスト読解に強引にあてはめるような性格のものではないことは哲学研究を専門とする審査員からも指摘がなされた。

本論文はフランス語で書かれているが、文章表現の面でもきわめて優れた水準に到達しており、ある意味で例外的ともいえる論理的明晰さおよび完成度の高さを特徴としている。哲学的著作の解釈、文学的テキストの分析において並々ならぬ力を示す論文であり、さらに、先行研究の把握

と論点の整理なども明確な問題意識のもとに的確になされている。フランスにおいて出版刊行されるにふさわしい水準に達しているという評価も審査員からなされた。

このような特質をもつ本論文の著者が「物の味方」の詩人ボンジュのうちに見出すのは、日常的な事物が日常的世界の文脈を越えて新たな様相を示し始める瞬間であり、そのような可能性である。論文執筆者は、ここにボンジュにおける出来事の思考を見出すわけであるが、ここでの議論の核心をなすのは、伝統的にボンジュ研究において語られてきた「主体」と「事物」という古典的な図式ではなく、ボンジュ自身が「示差的質 *qualité différentielle*」と名付ける事柄についての吟味を出発点とする「差異」および「差異化」の問題である。ある意味でデリダのボンジュ読解の影響のもとにある分析だといえるが、日常的な連関や「道具性」から解放された「もの」が、音声的、視覚的類縁性による別種の連関を通じて、これもまたボンジュ自身が「物遊び *objeu*」という新造語 (*objet + jeu*) をもって指し示す独自の詩的回路へと送り込まれる過程が丹念に分析されている点が独自の特徴となっている。

本論文において読解の対象となるもうひとりの詩人ミショーへのアプローチは「無限なるもの問い」へと収斂してゆく。ミショーにおいて「生」および「存在」はあらゆる限定された場から抜け出る力をもつ無限の連続体として想定されており、これこそミショーにおいて出来事の思考を語るべき要素をなしているとする視点から、ミショーの詩作およびデッサンの試みの検討がなされる。さらにこの問題はドゥルーズにおける「逃走線」の問題と関連づけられ、ミショー独自の特徴をなす、折れ曲がり砕ける「線」が、詩作品や素描デッサンのうちに執拗に追及される過程が精緻にたどり直される。

以上がボンジュとミショーの詩作を研究対象に据えた議論の大筋である。本論文執筆者にとって、ボンジュおよびミショーは作品分析の対象にとどまることなく、思考のスタイルを例示する模範的存在でもあり、すでに触れたように、前者との関連ではボンジュを論じるデリダの思考が改めて詳細な分析の対象となり、また後者との関連ではミショーを論じるドゥルーズの思考が同じく分析の対象となる。こうしてバディウにおける「出来事」の把握を議論の土台としつつ、デリダにおける「差延」の問題、ドゥルーズにおける「生成変化」の問題についての再検討がおこなわれ、「出来事」、「差異」、「生成変化」という問題系の連関に一貫した見通しが与えられている点に、哲学研究としての独自の価値を見出すことができる。デリダおよびドゥルーズについては、日本においても比較的よく論じられているが、バディウの「存在」と「出来事」をめぐる著作の意義に関しては、これが集合論や数理哲学を踏まえた難解な要素を孕んでいるということもあって、いまだ十分な紹介はなされていない。バディウの哲学思想を本格的に扱ったものとしても本論文には意義がある。さらにまたデリダを中心的に論じた章においては、テキスト実践および存在論の構築の二重性がなお宙づりのままの問題としてあり続けるという批判的読解が示されており、この部分は本格的なデリダ論として、とくに高く評価すべきという審査員の指摘が

なされた。

本論文は哲学研究と文学研究の二重の領域にまたがる、いわば「接ぎ木」とも呼ぶことができる操作を論理的につきつめたかたちでおこなっている。ユーモアを含めた詩的テキストの重層性へのさらなるアプローチがほしいという指摘もなされたが、本論文の知的な明快さを高く評価する点で審査員の一致した判断があった。本論文は長年にわたる真摯でひたむきな思索の積み重ねの成果を問うものであり、問題提起としての意義、さらに論文じたいの質の高さという点において抜きん出ているという評価がなされた。審査委員会では全員一致で博士の学位を与えるにふさわしいものと判断した。

2013年3月22日

主任審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

Ph. D (パリ第一大学)

千葉 文夫

審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

Ph. D (パリ第七大学)

鈴木 雅雄

審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

藤本 一勇

王維『輞川集』の研究

博士論文執筆者：紺野達也

本論文は、盛唐の詩人、王維の代表作とされる『輞川集』について、その表現のありようと評価の確立に至るまでの経緯、及びその文学史上の意義について考察したものである。王維の詩名は生前からすでに高く、没後まもなく代宗によって「天下の文宗」と称せられたこともあって、歴代、一貫して高い評価を得てきた。しかし、淡雅な詩風もあって、他の唐詩人ほどには詳細に、また系統的に研究が積み重ねられてきたわけではなかった。そこで、代表作とされ、後世の詩人たちから追慕されることの多かった『輞川集』の作品群についても検討の余地を多く残したまま、今日に至っているのが現状である。申請者は、この点に注目して、王維の生前にはほとんど注目を集めなかった『輞川集』がどのような経緯で代表作として定着するようになったのか、またその現象の背後にどのような文学史上の意義があるのかを明らかにしようとした。

本論文は、「序章」、「第一章、王維の詩と園林」、「第二章、輞川荘と詩」、「第三章、詩と絵画」 「第四章、『輞川集』の評価」、及び「結語」ならなる。

まず「序章」では、この論文での研究対象を明確に規定し、それに対する従来の研究成果とその問題点を整理するなどして、本論への導入としており、研究論文としてあるべき極めて整然とした構成をもって始めている。

第一章の「王維の詩と園林」では、『輞川集』における作品群と園林の関係性を考察する前提として、輞川荘以外で作られた考えられる王維の詩における園林の表現を検討の俎上に上げる。前半では「終南別業」詩における「終南別業」が「輞川荘」と同一か否かという問題を取り上げ、当時の王維の状況を文献に残されている記事や他の王維の長安から見た山々の描写の検討を通して、それらが別のものであるという結論を導き出した。この間の検証はかなり入り組んでいるが、論者の主張は明確である。また、「待儲光義不至」の詩を介して、初盛唐期の園林における詩人たちの交遊を考え、そこでの応答による「連作組詩」の存在を取り上げ、『輞川集』を検討する上での重要な材料を提示している。

第二章の「輞川荘と詩」では、まず輞川荘で作られた作品で、『輞川集』には収められなかった詩（「輞川閑居」「積雨輞川荘作」「贈裴十迪」など）に描かれる田園の風景描写を取り上げ、

その語彙を検討して、これらにおける田園風景の描写が輞川の地が出仕の場である長安と隔絶された精神的な充足を得る隠逸の場所であることを示すものとの認識を述べる。さらに、これを踏まえて、『輞川集』における王維の風景認識の考察に踏み込み、とくに詩題ともなっている「游止」の場所の典故を手がかりにして、『輞川集』において表現されている世界は『文選』を主とする古典に表現された長江流域以南の世界を再現したものと捉え、それは長安の近郊で見ることのできない「架空の世界」の構築を試みたものであると結論する。この問題については、従来は「極楽浄土の世界」「神仙の世界」「桃源郷の世界」などとの解釈があったが、これとは違った新しい見解を提示したことになる。ただ、そうであるとすると、江南世界へのあこがれはこの時期の詩人（たとえば白居易）たちが多かれ少なかれ持っていたものであることから、それらとの違いがどのあたりにあったのかの言及も望まれるところであった。

第三章の「詩と絵画」においては、後世、「詩中に画有り」「画中に詩有り」と称せられ、実際に詩人にして画の名手でもあった王維の詩を手がかりに唐代における「詩人」と「画家」の関係について考察し、王維と杜甫の詩においてのみ画家に言及する例のあることを指摘する。とくに王維が詩人と画家とを同列において評価していたことを指摘し、そのことが北宋後期以降、士大夫が作詩とともに画を描くことを一つの教養とするに至る気風の先駆となったこと、また『輞川集』の「再発見」の評価とも繋がっていることをいう。

第四章の『輞川集』の評価は、本論文のもっとも重要な部分であり、唐宋の間における王維詩の受容史、評価史の変遷と、その文学史上の意義について考察している。王維の没後、弟の王縉が『王維集』を代宗に献上した上奏文とそれへの答勅を検討して、前者が王維の性格や日常について記し、詩文について言及がないのと対照的に、後者には全篇にわたって代宗の王維の詩文に対する論評と個人的な愛好とが記されることを指摘し、その背景として朝廷の側に安史の乱以後の長安における文壇の空白を埋めるための文学の規範を示す狙いがあったと結論する。従来は王維の側に唐朝の権威付けの面からのみ考えられることが多かったが、これを唐朝の側にもその必要性があったという指摘は斬新である。またこの当時、勅命による別集の献上や編纂は極めて稀であった事実を洗い出し、しかも王維が安祿山からの官位（いわゆる「偽官」）を受けた身であったにも関わらず、これを認めたことに触れるのも重要な指摘である。ただこれを同時代の駱賓王などの同様の詩人や後世の「武臣」の事例と比較すれば、この事実の文学史上の重みがより一層鮮明になったのではなかったかと思われる。

この章の後段には、詩歌集『輞川集』と絵画「輞川図」の唐宋間における評価の変遷を取り上げ、本論文の総まとめとしている。そこでは、王維と輞川荘の関係については夙に周知されているながら、唐代の文献には詩集『輞川集』について言及するものがないという事実の指摘があり、宋代に入ると輞川荘に関係のない園林においても「輞川図」が想起されるほどに注目を集め、その「図」に関する詩歌が作られ、詩と画に優れていたことへの共感があったことを指摘する。さ

らに北宋後期になると、蘇軾とその仲間の文人たちが「輞川図」から『輞川集』という詩集を連想し、その詩集の特徴である「連作組詩」を典型と意識して同様の創作が盛んに行われるようになる。これを論者は、王維の没後とりたてて評価されることのなかった『輞川集』の「再発見」と呼ぶ。このことを契機として、南宋期に入ると、『輞川集』に描かれる輞川は隠逸の風景を代表するものとして共通の認識が生まれ、その結果、「輞川図」を介せずに、直接に『輞川集』への言及が一般化し、評価の定着に繋がったと論じる。この指摘は十分に首肯できるが、当時の文人たちの文学観とも密接に関わる問題であるので、背景の事情に更に踏み込んで考察すればおれば、より豊かで厚みのある論考になったであろうと思われる。

本論文は、王維詩における絵画と詩との関係を、その受容史、評価史の中で、『輞川集』という単独の詩集に基づいて具体的に指摘し、かつ詩歌誕生の地としての「園林」という観点を立てて論ずることで、これまでの王維研究に新しい展開をもたらしたものであり、本学において博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

2013年6月8日

| | | |
|--------|--------------------|-------|
| 主任審査委員 | 早稲田大学文学学術院 教授 | 稲畑耕一郎 |
| 審査委員 | 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 | |
| | 博士（文学）早稲田大学 | 内山 精也 |
| 審査委員 | 専修大学 教授 | |
| | 博士（文学）早稲田大学 | 松原 朗 |

満洲字表記の漢語に基づく近世中国語音の研究 『満文三国志』を資料として

博士論文執筆者：鋤 田 智 彦

本論文は、中国語音韻史研究の立場から、清初の順治七年（1650）刊の『満文三国志』 ilan gurun -i bithe に見られる満洲字表記の漢字音を整理帰納して、当時の中国語の音声について考えたものである。具体的に言えば、明刊『三国志演義』との対照のもと、『満文三国志』中の満洲字表記の漢語の地名・人名、官職名及び一部の一般名詞を漢字に同定したのち、二字や三字の地名・人名であればそれらを一字ずつに分解し、そのあと各漢字を中古音（隋『切韻』の音韻体系）の枠組みを使って整理・分析するという方法を取っている。常用字の場合、その出現回数は数千回に及ぶ。

序章では、満洲文字についての考証が為される。1599年にモンゴル文字に基づく無圈点満洲字が使用されるようになり、その後1632年に至り改良され有圈点満洲字となることなど、文字成立の歴史や研究史を簡潔にまとめ、『満文三国志』が満洲語文献としてもかなり早い段階の資料であることを強調した。

第1章では『満文三国志』の成立、版本について考証。先行研究（特に岸田文隆氏の論著）をよく咀嚼しつつ、編纂の経緯が詳しく辿られる。順治年間『満文三国志』が明・嘉靖本『三国志演義』に基づくこと、清・雍正本の満洲語部分が順治本の写しであり、漢字原文の部分は『李卓吾先生批評三國志』に基づいている可能性があること、順治本と雍正本以外に数種の写本もあること、そのほか朝鮮王朝の満洲語教科書『三訳総解』が『満文三国志』の一部を朝鮮語訳したものであること、などが的確に説明されている。本章の後半は満洲字表記の方式やローマ字転写、そして満洲語自体の音韻に対する説明である。漢字音専用の満洲字の転写については、時にメルレンドルフによる転写法に修正を加え、より整合的なものとした。

第2章では、本論文で参照された近世語音諸資料についての解説が為される。『満文三国志』以前のものとして『中原音韻』『四声通解』『韻略易通』、ほぼ同時期のものとして『西儒耳目資』『韻略匯通』、そして後の時代のものとして19世紀の『語言自邇集』を選び、それぞれの音韻体系を簡潔に説明した。

第3章からが本論ともいえるべき部分である。まずは『満文三国志』における声母表記が詳しく

分析される。中古音の枠組みを使って各漢字の音を整理、出現の頻度により一般的な対応と例外に分け、更に例外について一つずつ考察するという手法を採用。例外的対応については、単純な書き間違いの可能性を指摘した例もかなりあるが、音韻史研究にとって重視されるべき例も多い。

いわゆる「尖団の区別」と関連する議論は特に精緻である。北京などの北方方言で [ki- kʰi-xi-] (団音系) と [tsi- tsʰi-si-] (尖音系) がともに舌面音化を起し [tɕi- tɕʰi-ɕi-] の音になるのが、ちょうど明末清初の頃のことと言われており、実際に尖団関連の表記の揺れを多く見せる『満文三國志』は貴重な資料となる。複雑な状況の中に一定の法則性を見出し、舌面音化の過程に関して有力な説を提出しえたことは高く評価される。

これと関連して、同じ字に対して異なった音が付けられている場合の分析も説得力に富む。同じ時期の発音の揺れという可能性のみならず、出現する章回によって音が違う場合（たとえば「夏」[県]における hi- と si-）、複数の翻訳者が存在する可能性を指摘、また、語の使い分けに対応している場合（たとえば「経」の場合、経書の意では ging、人名では jing）、漢字音を取り入れた時期の違い、即ち層の違いによるものと推定した。

第4章では韻母の表記を撮ごとに詳しく分析した。第3章と同様の手法により、一般的な対応を示したのち、例外について一つずつ考察、ここでも様々な状況を想定し、各例において最も説得力を持つ可能性を提出している。具体的には、三等韻の拗音介音の現れ方、二等開口牙喉音、三四等合口韻母、止撰開口知組字などに関する分析において、新たな知見を提供した。現代北方方言に特徴的な一連の音が『満文三國志』にいち早く出現していることに対する分析も興味深いところである（「大」「累雷内」「巽」「尹」「軒」「風」「貞」「彪」「尋」など）。なお近世音研究において特に問題の多い入声については別に一節を立てて詳論した。

第5章は順治本と雍正本との間における表記の差違についての分析が中心となる。雍正本の書き誤りの多さを指摘する一方、順治本の間違いを修正した箇所があることも明らかにした。現代北方方言に特徴的な音が雍正本で始めて現れるという例も幾つか（「瑞」など）見出している。尖団の区別の問題に関しては、雍正本の方が順治本より却って保守的であることを指摘、18世紀初に進められた満洲字による漢字音表記の規範化との関連を論じた。

終章は全体のまとめとして、『満文三國志』の翻訳者および漢字音の基礎方言について考えている。後者については北京語・南京語のような有力方言のほか膠遼官話などをも検討の列に加えている。巻末には、本論文で分析された順治本『満文三國志』のすべての漢字音の字表が付載されていて資料的価値が高い。

以上のとおり、本論文は『満文三國志』の漢字音に関する全面的な研究として相当完備したものである。同時代あるいは前後する時代の資料との比較という面でやや物足りないところがあるものの、本論文が満洲語資料を使った近世中国語音韻史研究に着実な前進を齎したこと、そして、付載資料と相俟って、今後同方面の研究をする者の必読文献となるであろうことは疑いないこと

ろである。よって本論文は博士（文学）早稲田大学の学位を授与されるに値すると判断する。

2013年6月1日

主任審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

博士（文学）早稲田大学

古屋 昭弘

審査委員 早稲田大学文学学術院 教授

柳澤 明

審査委員 大東文化大学教授

博士（文学）早稲田大学

寺村 政男

近代中国における探偵小説の誕生と変遷

博士論文執筆者：池田 智 恵

学位請求論文受理の後、論文提出者は、学位委員会より指摘された誤字・誤植などの訂正を行い、製本したうえで、審査委員に学位請求論文を送付した。審査委員は、それを受けて当該論文の審査を開始し、2013年9月28日、午後3時より午後5時まで、早稲田大学文学学術院39号館第7会議室にて公開審査会を開催した。出席者は主任審査委員・千野拓政、審査委員・岡崎由美、高屋亜希、松浦恒雄、ならびに一般参加者5名であった。

公開審査会では、まず、論文提出者が論文の概要について、20分程度にまとめて報告し、次に、それを受けて審査委員が質問し、論文提出者が回答する方法で進められた。長編論文であるため、まず論文全体ならびに論文の書式・形式などについて質疑を行った後、第1部から第3部の各部について検討を進めた。その後、一般参加者からも質問を受け付け、最後に審査委員が講評を述べて、公開審査会を終了した。

論文の審査、および論文提出者の説明に基づき、各審査委員は提出論文に対して、次のような理解と評価を示した。

当該論文は、緒論「問題としての中国近代探偵小説」、および第1部「近代ジャーナリズムと読者の想像力——探偵小説創作の萌芽」、第2部「第1次探偵小説ブーム：翻訳から創作へ」、第3部「第2次探偵小説ブーム：探偵小説の転換」、結論「近代中国における探偵小説の過去・現在・未来」で、構成され、第1部から第3部は、それぞれ各3章ずつの論考からなる。

緒論では、論文提出者の問題意識や、先行研究を踏まえた本研究の意義、研究の方法が語られている。近代を迎えて文学に大きな飛躍が生まれたとき、エンターテインメントで起こった変化、飛躍を果たした探偵小説が、その後大きなジャンルとして定着していかなかった過程などへの問題提起がなされている。

第1部では、中国における近代探偵小説黎明期に当たる1910年代が取り上げられている。第1章「五十元の接吻——『新聞報』文芸副刊『快活林』に見る読者の想像力の変化」では、当時の読者が事件報道を娯楽的に読み、自らも文章を作って投稿する姿を通じて、探偵小説を消費し、創作する想像力が読者に根付いていく過程が検証されている。第2章「ホームズを想像・創造す

る——近代中国における探偵像の形成について」では、そうした読者の想像力の形成を受けて、探偵小説が翻訳から中国における創作へと発展していく過程を、探偵像の変化を中心に跡づけている。探偵小説の翻訳ではシャーロック・ホームズが人気を博したが、初期の創作でもシャーロック・ホームズが登場する。ただ、ホームズが中国に来て失敗する滑稽譚として語られていた。それが、しだいに東方のホームズなる探偵役が登場し、理想の探偵像が定着していくことになる。第3章「[犯罪]を消費する読者と『時事新報』「黒幕」欄」では、創作探偵小説の登場と時期を同じくして、中国的な犯罪物語の登場する過程が検証される。「黒幕」と呼ばれる事件の内幕や社会の裏側を描く、事件報道と創作の中間の物語である。その流行からは、探偵小説をめぐる中国の読者の想像力が、なかなか本格探偵小説へと脱皮していかない当時の状況が読み取れる。

第2部では、探偵小説の創作が一つのピークを迎えた1920年代が取り上げられている。第4章「理想の探偵小説を求めて——雑誌空間に見る読者の声」では、雑誌への読者の投稿から、当時の中国読者の姿が検証され、あわせて日本の同時期の読者との比較検討がなされている。そこからは、本格ものを好む読者が一定数生まれていながら、翻訳に比して作品の創作がそれについていかない状況が浮かび上がってくる。

第5章「怪盗から武俠へ——近代中国におけるアルセーヌ・ルパンの軌跡」では、ホームズとともに人気を博し、同じく中国の創作の中で登場した、東方のアルセーヌ・ルパンの形象の変遷を通じて、中国の探偵小説が変貌していく過程が描かれる。それによれば、ルパンは社会の裏側を熟知し、それを暴く人物として登場するが、しだいにそのような悪を懲らす「俠盗」としての性格を強めていく。第6章「[黒幕]に挑む探偵と怪盗」では、東方のルパン作品を中心に、探偵小説が「黒幕」的な要素を取り込み、中国の読者の間に定着していく過程が検証される。探偵小説は中国において、こうした形で土着化を果たしたことになる。

第3部では、探偵小説が再びブームを迎え、新たな展開を見せる1940年代が取り上げられる。第7章「1940年代における探偵小説の再興とその読者」では、当時の雑誌の調査をとおして、メディアや読者が海外の本格ミステリーやバルブマガジンの犯罪実話などを消化し、成熟した探偵小説の生産/消費の場や、精神の糧として探偵小説を求める想像力が生まれていたことが検証される。第8章「霍桑の限界——1940年代における探偵像の変化」、第9章「魯平の突破」では、1920年代の探偵小説作品のリライトと原作の比較、ならびに40年代の新作の分析を通して、東方のホームズや東方のルパンの形象がどのように変化し、深化したかが語られる。そこでは、この時期の探偵小説が、リアルさや人物造形、科学捜査に基づく論理的な展開や社会への洞察・批判などを獲得し、作品として深みを増している姿が浮き彫りにされる。

結論「近代中国における探偵小説の過去・現在・未来」では、提出論文全体のまとめとともに、それらを踏まえ、その後の探偵小説の変遷を視野に入れたとき見えてくる問題点や課題が語られている。

審査委員の意見は次のとおり。緒論では、これまでにない重要な問題意識が提示されていることが評価された。第1部については、探偵小説が以前の公案小説とはまったく異質なもので、外来の新しい概念であったために、探偵小説の「近代性」を正確に定義することや、当時の中国における探偵小説に対する誤解や理解の揺らぎを捉えることが難しく、本論文もそれを十分に克服しているとは言えないことが指摘されたが、そうした困難な問題に、当時の資料を博搜して丹念に読み込み、読者の想像力という斬新な視点から果敢に取り組んで、変革の一面をよく捉えている点が高く評価された。また、第2部については、東方のルパンが俠盗としての形象を深め、物語が「黒幕」化していく過程を明らかにした点は、中国の探偵小説の特殊性を考える上で、きわめて重要な指摘であると評価された。第3部については、これまであまり取り上げられなかった1940年代の探偵小説雑紙を丹念に調査している点、それに伴って、中国の探偵小説が到達した地点が提示されている点など、新たな地平を切り開いていることが評価された。

結論を含む提出論文への総合的評価として、問題提起の重要性、資料の博搜、新たな資料の提示、斬新な視点からの考察など、明らかにこれまでの研究水準を越えており、探偵小説研究をさらに前進させ得る貴重な成果となっていて、学位を授与するに相応しいという評価が、各審査委員から述べられた。

公開審査会終了後、審査委員で投票を行い、池田智恵さんの提出論文『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』への学位授与について、全員一致で可とする票決を得た。

2013年9月28日

| | | |
|--------|---------------|-------|
| 主任審査委員 | 早稲田大学文学学術院 教授 | 千野 拓政 |
| 審査委員 | 早稲田大学文学学術院 教授 | 岡崎 由美 |
| 審査委員 | 早稲田大学文学学術院 教授 | 高屋 亜希 |
| 審査委員 | 大阪市立大学文学部 教授 | |
| | 博士（文学） | 松浦 恒雄 |